喜多流大島家、フィンランド・スウェーデン公演

―日本・フィンランド国交樹立九十周年記念・アジア文化芸術祭に参加―

去る五月十一日～二十日の十日間、喜多流大島家が、国際交流基金の主催事業として、在フィンランド日本国大使館、在スウェーデン日本国大使館の共催を得て、ヘルシンキとストックホルムで能楽公演を実現した。

喜多流シテ方職分大島政允を団長に、大島輝久、大島衣恵、出雲康雅、狩野琇鵬、谷大作、笠井陸、狩野了一他二名、ワキ方江崎敬三、大鼓方大倉正之助、小鼓方竹村英雄、笛方滝沢成実、太鼓方大川典良、他スタッフ総勢二十一人の能楽公演団の足跡を追った。

五月十二日、ヘルシンキ、旧オペラハウス、アレキサンドラ劇場ホワイエにて、ヘルシンキ主要メディアへの記者会見が開かれ、大島政允、大島輝久、大島衣恵、大倉正之助の四名が出席した。先ず、大島政允が、能楽は六百年の歴史を持つ日本の誇るべき伝統芸能であること、型という様式美で形成され、非常に略式、最小化された所作、舞台形式の中で最大限の演劇効果を発揮する仮面劇であり、その主要テーマは人間の持つ愛別離苦、会者定離などの普遍的概念を持つことを強調した。その後、大倉正之助が、大鼓、小鼓のデモンストレーションを行った。大鼓、小鼓、能管、太鼓といった囃子が、演者の芸と調和し一体となって演じられること、陰と陽のある音楽的特性などについて話し、また、同席した記者たちに大鼓、小鼓の実体験の機会を与えた。ヘルシンキン・サノマット紙、ユッシ・トッサバイネン記者は以下のように述べた。「アジア・イン・ヘルシンキ・フェスティバルは、フィンランド人たちにアジア地域の多彩な舞踊演劇を紹介してきた。本年は能楽で、演じられるのは、『羽衣』と鼓にまつわる中国の伝説が元となった『天鼓』である。今回、フィンランド人のために、字幕が用意された。能の台詞は非常に様式化されているため、多くの日本人にとってさえ理解しにくい。と言っても、能は広く日本で演じられている。能の起源は、十四～十五世紀までさかのぼり、これは世界でもっとも古い演劇の一つである。大島家で特に興味深いのは、女性の演者がいることである。私が見てきた能の演者はつねに男性であった。伝統的には男性が女性の役も非常に様式化された形で演じてきたが、しかしそれは、女性的な表現をまねる歌舞伎とは違ったものである。女性の演者が男性と似た声色を使うのを聞くのは興味深い」フィンランドでの能楽公演がいかに関心と期待が高いか知ることができた。

ヘルシンキ公演の会場、アレキサンドラ劇場舞台、ほぼ六間四方に設置された能舞台は、影向の松を描いた鏡板を配し、橋掛こそ数メートルの簡素化されたものであったが、現地スタッフの出来るだけ日本の能舞台に近づけたいという熱い思いの賜物であった。ストックホルムでは、著名な音楽家や俳優が出演することで有名な旧オペラハウス・スードラ劇場舞台で公演された。

演目は、ヘルシンキ、ストックホルムとも、舞囃子「神楽」、仕舞「土蜘蛛」、囃子「獅子」、能は一日交代で「羽衣」、「天鼓」であった。公演に先立って、解説が、大島輝久、通訳FKF大学日本研究科教授ヨウニ・エロマ氏、グンナル・リンダー氏によってなされた。能「羽衣」においては、一の松に掛けられた羽衣から三保の松原という広大な松林を想像する。能は最小限の作り物から一つの象徴を引き出す特性について述べた。天人の羽衣を得た漁夫とその返却を哀願する天人のやりとりから、羽衣を返したら約束の天人の舞をしないのではないかという浅はかな漁夫の疑念に対し、含蓄のある名句「疑いは人間にあり、天に偽り無きものを」を引用し、嘘、偽りのない天女の崇高で気品のある舞を鑑賞して欲しい旨説明がなされた。大島衣恵演ずるシテ天人は、清楚で凛とし、優麗典雅な舞であった。字幕説明の効果もあったが、観客の一人、クル・カイキネンさんは、「シテ、ワキ、地謡方、囃子方が一体となったハーモニーが精神の浄化を齎す日本の伝統舞台芸術の世界に感動した」と感想を語っていた。

能「天鼓」では、観客は、愛器を惜しんで一命を失った天鼓、その罪なき天才を殺し、家宝を奪うという帝王の暴虐、父の愛情と決意によって鳴らぬ鼓が鳴るという神秘性を通し、最後には帝王を許し楽を奏するストーリーを観客は心から理解したと思われる。スウェーデン公演での観客の一人は、「最後には、自分の命を奪った帝王を許し、爽やかに舞楽を奏する。この許しこそが現代社会共通のキーワードの一つではないか。このテーマを六百年の歴史を持つ能楽の世界に見たことが驚きであった」と大島輝久に述べている。客席の一階から三階までを埋め尽くした観客の拍手は、演能後数分間鳴りやまず、異民族、異文化、言語の壁を超え、観客と演者が一体となった精神的融合の瞬間であった。

特筆すべきは、フィンランド、スウェーデンで共通して、観客の能を鑑賞する集中力であった。文化、芸術活動が生活の一部として定着し、洗練されたマナーに驚嘆し、教育、文化的水準の高さを感じた公演でもあった。

更にフィンランド、スウェーデン両国において、能楽公演と合わせて、フィンランドFKF大学日本研究科、ストックホルム演劇アカデミーの学生を対象に能楽ワークショップが開催された。初めに大島政允による舞囃子「高砂」のデモンストレーションが行われ、参加者全員を対象に、能の基本的な型を指導し、その後、五～六人のグループに分け、「高砂」のキリの一部分を仕舞、小鼓、大鼓、能管、太鼓の各役ごとに履修を課した。約三時間余りの稽古であったが、全員が「高砂」キリの最終部を発表したことも驚きの一つで、異文化交流の貴重な体験となった。

喜多流大島家による能楽公演という文化交流事業で、日本研究・知的交流事業を通じて日本に対する諸外国の理解を深め、国際相互理解を増進するという国際交流基金の目的は十分に達成されたと思う。

寺田良二

「羽衣」大島衣恵（アレキサンドラ劇場）

ワークショップ（ストックホルム演劇アカデミー）

back

09/09/01「能楽タイムズ」第690号